

【書評】

高橋 源一郎・辻 信一 共著
『弱さの思想—たそがれを抱きしめる—』

大月書店, 2014年2月, 207頁

岡 部 光 明

弱さの思想！ 一体そんなものがあるのか。あるとすれば、どんな考え方なのか。世の中は「強さ」が支配しているのに、弱さを考えることに果たして意味があるのか。そもそもこのような表現は評論家の言葉遊びに過ぎないのではないのか。それとも出版社が販売戦略のために奇をてらって付けた書名ではないのか。

本書を手に入れば（あるいは書名を見ただけで）こうした疑問が湧いてくるかもしれない。その一方、著者は現在最も油の乗りきった二人の論客である高橋源一郎氏（作家・評論家）と辻信一氏（文化人類学者）であり、彼らの共著だからきつと斬新な切り口で現代社会を見抜く視点を提供しているに違いない、という期待感が高まる。

1. 本書の構成と基本的主張

本書は二人の対談形式で構成されており、全体は、序文に続く3つの章から成る。まず長文の「はじめに」において、本書の問題意識と共同研究のきっかけが述べられ、本書の結論である「弱さの強さ」という視点がありうるということが簡単に説明される。

第1章「ぼくたちが『弱さ』に行きつくまで」では、著者たちそれぞれの経験が「弱さ」という視点に向かわせ、本書のもととなった共同研究に行き着いた経緯が述べられる。

第2章「ポスト3・11～『弱さ』のフィールドワーク」は本書の約半分のページ数を占める中核部分であり、著者たちが行なった国内外における多様

なフィールドワーク（実地研究）が報告されている。その研究を通じて、3・11（東日本大震災）以降は「弱さ」の思想にとりわけ大きな意味があることが主張されている。

最後の第3章「弱さの思想を育てよう」では、人間性を喪失した現代社会を変革していくうえで「弱さ」の価値に着目することで各種政策の重要な処方箋が得られる、と結論している。

本書は対談形式をとった書物ということもあって、論点が書物の中で散在したり、あるいは必ずしも整然と展開していない部分がある。このため本書全体で主張していることがらを、まずできるだけ忠実に（一部評者が補完しつつ）整理しよう。そうすれば表1のようになる。

本書が基本に据える枠組みは、「強さ」の思想と「弱さ」の思想の対比であり、それによって後者の必要性を打ち出している。まず、社会で無意識のうちに承認され、助長されている「強さ」の思想のエッセンスを要約するならば「大きいこと、拡大、限界の突破」はいずれも素晴らしい、という考え方になる、と性格づけている。そして、それらに付随して「均質化」も望ましいことになる。この結果、巨大化、大量化、集中化、高速化、複雑化、グローバル化、は当然の成り行きだという認識になる。

これに対して「弱さ」の思想は「人間も生態系の一環である」という認識が基礎となっており、出発点が全く異なる。すなわち、動植物の体が無限に大きくなることはなく（成長をいつどこで止めるかを心得ており）、また個体が永遠に生き続け

表1 二つの思想の対比

	「強さ」の思想	「弱さ」の思想
基本的考え方	<ul style="list-style-type: none"> ・大きいこと、拡大、限界の突破は素晴らしい。均質化も望ましい。 ・巨大化、大量化、集中化、高速化、複雑化、グローバル化、は当然。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人間は生態系の一環だからその制約ないし限界を強く意識することが必要。小さいことは素晴らしい。 ・スモール、スロー、シンプル、ローカルなどの「弱さ」に大きな価値がある。
達成手段	<ul style="list-style-type: none"> ・他人への強制力（規制・法律・軍隊・武器・競争圧力等）が基礎。 ・とくに競争による優勝劣敗によって効率性と拡大を達成。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の内に働く力（パワー）を重視。それこそが真の強さ。 ・他人への強制力（フォース）は、強さと競争を至上原理とする社会であり本質的な脆さを内包。
弱者¹の位置づけと対応	<ul style="list-style-type: none"> ・弱者は厄介なもの。 ・強者とは区別して別途対応する、ないし隠蔽すべき存在。 	<ul style="list-style-type: none"> ・弱者の「弱さ」²は社会にとって不可欠のもの。そこに人間的な価値や意味を探ることができる。 ・強さと弱さという現代社会の二項対立を溶解あるいは無効化していけば、支配・被支配のない、より良い社会になる。
代表的思想	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の主流派経済学 	<ul style="list-style-type: none"> ・E. F. シューマッハー（経済学者） ・サティシュ・クマール（インド人思想家） ・本書

1. 社会的弱者のこと。すなわち精神障害者、身体障害者、介護を必要とする老人、難病にかかっている人、財産や身寄りのない老人、寡婦、母子家庭の親子、さまざまな差別に悩む人など。
2. 弱さゆえの力の発揮（分かち合い、つながり）、弱さこそその輝き（死に向き合った時に時間が輝きだすこと）などによる明るさ、にこやかさ、穏やかさ、やさしさ、晴れやかさなど。

（注）本書の記述を踏まえて評者が作成（一部評者が補完）。

ることもない（個体は必ず死を迎える）というのが生態系であり、人間もその性質から逃れられない存在であることを強く意識する必要がある、と著者たちは主張する。したがって「小さいことは素晴らしい」という発想になる。その性格を敷衍すれば、スモール（小さいこと）、スロー（遅いこと）、シンプル（単純なこと）、ローカル（地方のこと）など、従来は負の価値をもっていた事柄に大きな価値が出てくる、と主張する。

次に、それぞれの思想を達成する手段としては、強さの思想の場合、他人への強制力、すなわち規制・法律・軍隊・武器・競争圧力等が基礎になり、それらを用いて強さを實現する仕組みが構築される、との理解が示される。とくに、社会の基礎になる経済については、競争を重視し、それによる

優勝劣敗によって効率性と拡大を達成する思想だと規定している。これに対して弱さの思想の場合、自分の内に働く力（パワー）を重視、それこそが真の強さだと主張している。そして、他人への強制力（フォース）を基礎とする現在の社会は、競争を至上原理とする社会に他ならず、一見強さがあるようにみえても本質的な脆さを内包している、と批判している。

では弱者（精神障害者、身体障害者、母子家庭の親子など社会的弱者）はどう位置づけられるのか。まず強さの思想においては「弱者は厄介なもの」とみなされ、強者とは区別して別途対応を要する（ないし隠蔽すべき）存在として扱われる、と著者は性格づけている。これに対して弱さの思想の場合、弱者の「弱さ」はむしろ強さの側面を

持っており、それは社会にとって不可欠のものであることが強調される。すなわち、弱さゆえに人間の力が発揮され（分かち合い、つながり）、また弱さにこそ輝きが湧き出る（死に向き合った時に時間が輝きだす）などがあることを強調、弱さによって明るさ、にこやかさ、穏やかさ、やさしさ、晴れやかさなど、人間的な価値や意味を探ることができるとしている。そして、強さと弱さという現代社会の二項対立を溶解あるいは無効化していけば、支配・被支配のない、より良い社会になると結論している。

以上のように要約できる強さに関する代表的思想は、現在の主流派経済学にみられる。そして弱さに注目する思想はE. F. シューマッハー（経済学者）やサティシュ・クマール（インド人思想家）の視点であり、本書もそれらを継承するものである、と述べている。

2. 本書の具体的な内容

第1章では、著者たちがなぜ「弱さ」に目を向けることになったかが述べられている。まず高橋（敬称略、以下同じ）の場合、次男が急に重篤な病気（急性脳炎）になり、その付き添いのため病院に行ったことが発端であった。すなわち、病院でさらに深刻な病気にかかっているある子供の母親が信じられないほど明るいのに驚くとともに、それはいつ死ぬかわからない子供が母親に力を与えているに違いないと直感、『弱さ』というものには何か秘密があるんじゃないか、と思ってこのことを探りたくなったからであった（19-20 ページ）。

一方、辻の場合には、幸せとか豊かさとかの調査をしていて「べてるの家」（北海道にある精神的障害を持つ当事者たちの自助と互助のコミュニティ）と親しくなったことが契機であった。すなわち、障害をかかえて「弱者」と呼ばれている人たちがいるその場所に不思議な居心地の良さを感じ、またその人たちが幸せそうに見えたことが、弱さに対して関心を持つきっかけであった。

そして、著者たちの人生をもっとさかのぼって

考えると、両者には学生運動、留置所での勾留、日雇いや季節労働者の経験など、共通の経験が多かったことが語り合われている（27-56 ページ）。

第2章では、8つのケーススタディ（著者のいずれか一人または両者が深く関係した実地調査）の要点が報告されている。最初に登場するフィールドワーク1では、脱原発運動を継続している瀬戸内海のある島（祝島）の住民の生活を報告、そこでは圧倒的多数が高齢者であるが、「分かち合い」によって人間的なつながりのある明るく楽しい生活を送っていることが述べられている。

フィールドワーク2では、イギリスの子供ホスピス（リーズ市のマーティン・ハウス）の実態が報告される。そこでは（1）死にゆく子供という最弱の存在が周囲を変える力を発揮していること（ユーモアや思いやりを周囲の人に教えている）、（2）一番弱いところに向けて設計された施設であるからこそ、みんなにこやかで穏やかなそしてすてきな空間が生まれていること、などが特徴的であるとしている。

フィールドワーク3では、精神病院が真ん中にあるオランダの町（エルメロー）が取り上げられる。その町は、町の真ん中に精神病院を計画的に作ったのではなく、逆に精神病院という「弱さ」に人々が向き合い、試行錯誤してコミュニティを形成していったこと（弱さによる逆統合）が特徴であると指摘、そのため町は不思議な心地よさを持っていると報告している。

フィールドワーク4では、ダウン症の子供たち（概して極端に肯定的な絵を描くのが特徴）のためのアトリエの設立（志摩半島）が起点となり、上記オランダの例と同様、30年間かけて特徴ある町が形成されていった様子が報告されている。そこでは子供、障害、芸術など「弱さ」や無駄が中心に据えられているため、やさしさ、悪意のなさ、晴れやかさがみられ、人々は色々な気づきをもたらえるコミュニティを形成している、と観察している。

フィールドワーク5では、日本各地に点在する宅老所の状況が報告されている。そこでは利用者、スタッフ、ボランティアの境界線が引かれておら

ず、このため認知症の老人のほか、様々な悩みを抱えた人や心に傷を負った人たちが寄り集まっている。そして宅老所は、こうした人たちが自身が草の根から居場所を創造していった点に特徴があり、その結果、そこには弱さの肯定とつながりがあることを指摘している。

フィールドワーク 6 では、身体と精神の両方に障害がある重傷心身障害児の施設（静岡県富士市に20年前に設立）の理念と実態が記述されている。その施設は重傷心身障害児を単に「収容する」のではなく彼らの「自立」を促してゆくこと、そしてそのために彼らを支える態勢をどれだけ作れるかに重点が置かれていること、が説明される。そして、こうした障害児は、実は親に対して貴重な教育の機会を与えていることがインタビューによって明らかにされている。また、これまでのフィールドワークを振り返ると、弱さへの対応には多様性という観点が欠かせないことが指摘されている。

フィールドワーク 7 では、自由教育を標榜する「きのくに子どもの村学園」という学校（文科省認可学校）における教育が、通常の小中学校と異なっているかが簡単に紹介されている。子どもを中心においている点で、弱さに関連している。

最後のフィールドワーク 8 では、著者の一人（辻）が7日間体験した山伏修行の様子が紹介され、それが老いや死という弱さへの対応と関連付けられることが述べられている。

第3章では、以上のフィールドワークを踏まえ、社会を変革していく思想として「弱さ」がどんな意味をもつのか、が考察される。そこでは(1)人間は本来弱い存在であり（子どもは母親に長期間依存し、家族に依存しなければ生きていけない）、このため人間は文化的存在、そしてコミュニカルな（共同体の一員としての）存在になったこと、(2)競争は共同体を内側から滅ぼしていくものであり、このため競争主義を止めれば弱さが「強さ」となって現れること、(3)その結果、人間らしい社会が作り出せること、が主張されている（160-164ページ）。

これに対して現実には「社会は競争で成り立つ」という思い込みが人々を呪縛し続けており、それこそが現代社会の根本問題であると糾弾（188ページ）、そしてその根源は経済学にあると指摘している。すなわち現代の主流派経済学は(1)社会的な諸問題（環境、自然界など）を外部とみなして社会から自立した一つの狭い空間を想定、その中に閉じこもっている点で閉鎖性が強いこと、(2)そこでの前提として「合理的個人」という一種の神話ないし「すごく単純でお粗末な人間論」（189ページ）を土台としていること、に大きな問題があると批判している。

一方、日本や世界を見渡すと、なるべく市場とは関係のないところで生きていこうという流れが至る所にみられ、そこには、明るさとか楽しさを感じられると指摘している（194ページ）。そのような状況が生じるのは、苦役（弱さ）がどこかである種の喜び、すなわちギフト（贈与）に変換される（例えば時間の貴重さに気づいて時間が輝き出す）からである（200ページ）と分析している。そして我々は、強さと弱さという二元論からまず抜け出す必要があり、そうすることによって社会はより良い場所になる、と結論づけている。

3. 評価

本書の特徴は、第一に、弱さの中にある種の「強さ」が潜んでおり、それが人間らしさにつながっていることを明らかにした（再発見した）点にある。そしてそれを単に机上の思想としてではなく、国内外での幅広い周到な実地調査を踏まえて主張すると同時に、それが社会改革の新しい処方箋になりうることまで言及した点が大きな貢献といえる。

人間についてであれ、組織についてであれ、世の中は強いことを評価するのが通念になっている。例えば、次々と刊行される書物の題名をみても「強さを身につける作法」「打たれ強さの秘密」「強い男になる術」「強さを支える戦略」「強さの原理」「強さの奥義」など、ほとんどの場合、強さに価値があることを当然の前提にしている。こう

した中で著者たちの心優しさが弱さに目を向けさせ、そこに強さと人間らしさが潜んでいるとする主張は新鮮であり、また論旨は説得的である。なお本書は、著者たちがそれぞれの専門領域から弱さという共通視点をもって接近した研究結果が相互に響きあい、あたかも心地よい二重唱を聴くような作品になっている、と評者は感じた。

第二に、現代の主流派経済学の問題点を非常に手厳しく、そして妥当性を持って批判していることである。評者は著者たちの主張に共感する。すなわち、主流派経済学（アングロサクソン流の経済学、とくにミクロ経済学）においては、個人は利己主義的かつ合理的に行動する主体であるという前提が無意識のうちに置かれている。そして全ての議論はそれが出発点となっており、人間の行動動機についてそうした仮定や分析手続きを踏んでいない論文は専門誌に掲載される可能性が乏しいのが現実である（岡部 2012：30-40 ページ）。

このため、経済学研究者の視野が狭隘化してしまっている。そして、研究結果を踏まえた政策提言においても、ほとんどの場合「規制撤廃によって効率化を図るべし」という効率化一辺倒の紋切り型提言に終始することが多いのが実情である。このため、公平性、安全性、文化的価値などはほとんど考慮の外に置かれるほか、人格を備えた人間観（例えば労働者は金銭や昇格以外にも能力開花、達成感、一体感、社会貢献の感覚といった行動動機を持っていること）に立って政策提言がなされることは残念ながら稀である（岡部 2009；2012：52-58 ページ）。

そもそも人間は、利己心だけでなく利他心も併せ持つ存在であることが、社会科学、自然科学、医学など多領域からの研究によって明らかにされている（岡部 2014b）。こうした状況下、近年はNPO/NGO（非営利組織/非政府組織）など、利益追求を行動基準としない組織体の比重が世界的に高まっている。したがって経済学研究者は、上記のように自己限界を設定した研究ではなく、このような現実を直視した研究を進める必要性が大きい（岡部 2012, 2014c）。また政策提言に際しては、社会には効率性以外にも多様な価値があることを

知ったうえでそれを尊重する謙虚さを忘れるべきでない。本書は、経済学研究者に対してそうした熟慮した対応を強く求めるものでもある。

第三に、本書では人間や社会への深い洞察がなされているので、人間の本来的な生き方を示す類似の思想に一脈通じる面を持つことに気付かされることである。一見、弱さと見えることを深く観察すれば、そこには強さがあり、また人間らしさも秘めている、というのが本書の主張であるが、例えばそれは「どんな試練に会うときでも、それをこの上ない喜びと思いなさい」（『新約聖書』「ヤコブの手紙」1章2節）という思想にもつながっているのではなかろうか。

試練とは、順風満帆と対照的に困難な状況に直面すること、あるいは苦難に陥ることを意味する。そうした場合、人間にはまず弱さがあらわれる。しかし、そうした試練に直面したのは何か深い意味があると受け止め、試練を機に従来の自分の感じ方や行動の仕方を変えてゆき、自分の本心に従った対応をしていくなれば、深い喜びを伴った新しい人生を拓いてゆける可能性が大きい（岡部 2013, 2014a）。つまり「試練はよびかけ」と受け止めれば、それを契機として人間の内なる力を解放することができる。現に、そのための方法と道も用意されている（高橋 2002, 2009）。試練は人間の強さ（魂の力）を発揮させる契機になる。本書の洞察は、深いところでこうした思想につながっていることを評者は感じた次第である。

第四に、本書は大学の「国際学部」の理念を示す良い宣伝書になっていることである。国際学部という名称からは、外国語や外国の政治・経済・文化、あるいは日本の対外関係などを学ぶ学部というイメージが持たれやすい。しかし、著者たちが所属する大学（明治学院大学）の国際学部では、単にそのようなことを学ぶだけにとどまらず、国境とは関係のない人類が直面する現代社会の問題（本書で扱われたような問題）が重要な柱の一つであること（国際学部には奥行きがあること）を伝える書物になっている。当該学部の教員によってこうした書物が続々刊行されることを期待したい。

一方、評者には十分理解できない点もなくはなかった。例えば、第1章で紙幅を費やして両者の経歴を語り合っている部分や、第2章のフィールドワーク8(山伏修行の体験)は、それぞれ興味深いことではあるが、本論との結びつきが他の部分に比べて比較的薄く、含意を読みとりにくいように感じた。もしかすれば、これらは著者が重視する「遊び」に該当するのかもしれない。また、本書は全体として読みやすい工夫がなされている(例えば関連する写真が少なからず挿入されている)ものの、書物の中心的論点を読者に的確に把握してもらおうと多少工夫の余地があるように感じた。例えば、主要点を整理した前出表1のようなものを挿入しておけば、読者としてはよりの確にかつ迅速に論点を理解できたのではないかと思う。

さらに、著者が描く弱さを重視する社会を実現するための方策についてほとんど言及がないのも、多少物足りない。草の根運動によるのか、それとも政府が進める政策においてその思想を反映させてゆくのか。もっとも、これらは読者につけられた課題かもしれないが。

本書は、現代社会を「弱さ」という斬新な切り口で理解し、人間らしい社会を構築する上で重要な示唆を与える貴重な書物であると思う。

高橋佳子(2002)『「私が変わります」宣言—「変わる」ための24のアプローチ』三宝出版。

高橋佳子(2009)『Calling—試練は呼びかける』三宝出版。

[引用文献]

- 岡部光明(2009)「経済学の新展開、限界、および今後の課題」明治学院大学『国際学研究』36号、29-42ページ。
<http://gakai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2009.html>
- 岡部光明(2012)『現代経済学を超えて—私の経歴と考え方の発展—(明治学院大学最終講義)』慶應義塾大学出版会。
- 岡部光明(2013)「試練は呼びかけと受け止める」『大学生の品格—プリンストン流の教養24の指針—』3章19節、日本評論社。
- 岡部光明(2014a)「個人の『幸せ』は社会とどう関連するか」明治学院大学『国際学研究』45号、65-89ページ。
- 岡部光明(2014b)「Do for Others(他者への貢献):黄金律および利他主義の系譜と精神構造」明治学院大学『国際学研究』46号(本号)、19-49ページ。
- 岡部光明(2014c)「最近の経済学の動向について:特徴、問題点、対応方向」慶應義塾大学『KEIO SFC JOURNAL』Vol.14 No.1(近刊)。